

にいがた教育フォーラム 中間報告会

吉澤 克彦

1. 新潟大学教職大学院平成28年度中間報告会プログラム

新潟大学教職大学院では、4月からの学びの発表の場として、中間報告会を開催した。

午前のシンポジウムでは、「現場を拠点とした学びのあり方とその深まりの探究」をテーマに、現時点における学びの実際をご報告するとともに、午後のポスターセッションでは、各院生による発表、ラウンドテーブルでは、院生、専任教員、参加者から成る小グループでの協議を企画した。

日時 平成28年8月19日（金）10：15～16：10

場所 新潟大学五十嵐キャンパス教育学部棟

【午前】全体会・シンポジウム 教育学部B棟2階204

10:15～10:25 開会のあいさつ 高橋姿学長 小久保美子専攻長

10:25～10:45 教職大学院での学びの流れについての説明
一柳智紀准教授

11:00～12:30 シンポジウム 進行 一柳智紀准教授

【午後】分科会 教育学部B棟

13:30～14:30 院生によるポスターセッション

14:40～16:10 ラウンドテーブル

ポスターセッションとラウンドテーブルはテーマごとに開催した。

- ① B棟103教室 授業力
- ② B棟104教室 学級づくり
- ③ B棟201教室 学校経営
- ④ B棟107教室 特別支援

2. 午前のシンポジウム

院生は、在籍校で実習や課題研究を行い、そこに研究者教員と実務家教員がチームを組んで出向く。これは、当教職大学院の特色の1つであり、理論と実践の往還を目指したものである。

そこでの学びについて、連携協力校である新潟市立松野尾小学校本間アユ子校長と在籍院生の鈴木綾子、特定連携協力校である新潟市立浜浦小学校在籍院生の藤塚静治とそこに配属されている学部

新卒院生三條奏子、そして、両校の担当である当教職大学院実務家教員の高橋雄一が話題提供を行った。

シンポジウムの話題提供などは、以下のように行われた。

1) 松野尾小（連携協力校）の話題提供

【本間校長】：週2回在籍校で学んでいることを生かし、学びの場に職員を同席させたり、研修会を開いたりして、教職大学院の学びを職員に還元した。また、院生が授業をした際には、保護者にも案内を出し、参観する機会を設けるようにした。

【鈴木院生】：校長から「遠慮せずにどんどん先生方や児童と関わりなさい」と言っていたこと、全校朝会で大学院での学びを紹介する機会をいただいたことで、勤務している職員や児童と深く関わる事ができている。

2) 浜浦小（特定連携協力校）の話題提供

【藤塚院生】：学級担任をしながら学校経営コースで学ぶことが、学校課題とどう関連づけられるか省察し、課題研究を続けている。

【三條院生】：学部新卒院生として週2回浜浦小で児童と関わる機会を持ちながら学び、大きな気づきを得ている。そして、学校経営コースの藤塚院生とともに学ぶことで多角的な視野を持つことができている。

3) 話題提供後の進行

このような学びが紹介された後、これらを受けて、専任教員の高橋が大学側の立場から「在籍校での学びと院生の課題との関係」について補足説明を行った。

次に、新潟県教育委員会管理主事の今井渉氏及び新潟市教育委員会管理主事の山田浩之氏から上記の話題に対するコメントや激励、期待のお言葉をいただき、これらを統括して、専任教員の相庭和彦が意見を述べ、最後に、フロアとの意見交換を行った。

3. 午後のポスター発表とラウンドテーブル

ポスター発表では、院生が、学びの履歴と研究の進捗状況を報告した。ラウンドテーブルでは、院生の研究内容についての質疑応答や、参会者の勤務校での実践紹介など、活発な意見交換がなされた。

参会者アンケートには、「大学院での学び方や院生の研究ややる気分かり、参加してよかった」という声が見られた。

次頁は、院生の発表題目一覧と新潟日報8月20日の記事である。

| 氏名 | テーマ | グループ | 発表題目 | ファシリテーター |
|--------|-------|------|---|----------|
| 金子 暢也 | 授業力 | 1 | 学力と社会情動的スキルを一体的に育成する 高校英語授業の取り組み | 井口 浩 |
| 齋藤 潤次 | 授業力 | 1 | 主体的で協働的な学びの中で「わかる」と「できる」を深める授業 ～学び方を育てる小学校体育の授業づくり～ | |
| 齋藤 誠也 | 授業力 | 2 | 学びを広げ深める姿を具現する協働的な学習活動の在り方 | 兵藤清一 |
| 波多野 紗稀 | 授業力 | 2 | 「つながり」を生む授業デザイン | |
| 三條 奏子 | 学級づくり | 1 | 非認知能力を高める授業を目指して | 一柳智紀 |
| 平出 久美子 | 学級づくり | 1 | 児童の自己肯定感を高め、よりよい人間関係を築く力の育成 | |
| 松原 由紀子 | 学級づくり | 1 | 学び合い、高め合う学級集団づくり | |
| 金田 良哉 | 学校経営 | 1 | 教師の自己開示と聞き手の反応および教育活動との関連 | 宮園 衛 |
| 館岡 信也 | 学校経営 | 1 | 地域と学校が理念を共有した学校づくりに向けて ～地域と学校が求める資質・能力を基にした地域連携を通して～ | |
| 大矢 康之 | 学校経営 | 2 | 生徒指導を基盤とした活力ある学校づくり ～ 同僚性を高める実践 ～ | 神村栄一 |
| 児玉 かおる | 学校経営 | 2 | 教職員の組織改善による教育課題の解決 | |
| 藤塚 静治 | 学校経営 | 3 | 特別活動を核とした学校づくり 学校教育目標の実現をふまえながら同僚性の発揮をうながす 「双方向的参加構造」型会議に着目して | 金子淳嗣 |
| 村上 大樹 | 学校経営 | 3 | 小学校教員の外国語教育に関する意識向上を目指した校内研修の在り方 | |
| 鈴木 綾子 | 特別支援 | 1 | 気になる子へのアプローチ ～子どもの成長を支える教師のまなざしとチーム力～ | 吉澤克彦 |
| 長谷川 美鈴 | 特別支援 | 1 | 特別な支援を要する児童から考える学級支援 | |
| 木村 杏子 | 特別支援 | 2 | 共生社会の実現を目指した校内のインクルーシブ教育システムの推進 ～特別支援教育コーディネーターの役割とその在り方～ | 古田島恵津子 |
| 中明 加奈枝 | 特別支援 | 2 | 通常学級における支援を要する生徒への対応 ～学習スキル・学習意欲からのアプローチ～ | |

けながら学ぶことができ
る。ありがたいシステムだ
と述べた。
質疑応答では派遣元の校
長らが、実習の際に大学教
員も学校を訪れることを評
価。「忙しい現場だからこ
そ、ほかの教員が立ち止ま
って考えるきっかけにな
る」といった報告があった。

中間報告会
うと創設された制度。新大
では週2回の実習を自分の
学校で行えるのが特徴だ。
1期生19人のうち13人が現
職教員で、3人は通常の授
業を受け持ちながら学んで
いる。
ボジウムで
は、新潟市
松野尾小か
ら派遣され
た鈴木綾子
さん(1)が
「同僚や子
どもたちと
の関係を持

「学びで視野広がった」
新大教職大学院教員ら中間報告会
新大が4月に設置した
教職大学院の中間報告会が
19日、新潟市西区の五十嵐
キャンパスで開かれた。写
真は、大学院で学ぶ現職教
員らが、教育関係者約70人
を前に「視野が広がった
と感じている」と学習の成
果を発表した。
教職大学院は、学校が抱
える課題に対応できる専門
性を持った教員を養成しよ